

ZENBI

全国美術館会議機関誌

February 2022 [Vol.21]

Feb. 2022

Optec Spotlight



ERCO Optecは、美術館・博物館の照明に必要な機能と品質を全て持ち、さまざまな展示様式にも柔軟に対応することができるLEDを光源としたスポットライトです。
ERCO 独自開発・製造の最新型光学レンズシステムにより、作品のみをアクセント照明するスポット配光から、壁面を均一に照射するウォールウォッシュ配光、**8m**超の高天井の空間にも対応する高出力タイプまで幅広く品揃えされており、鑑賞者だけでなく運営者もストレスなく最高の光環境を構築できます。

ERCOでは長年にわたり培ってきた世界中の展示空間における経験をいかして、製品だけではなく、最適な照明ソリューションの提案をいたします。

ERCO

ライトアンドリヒト株式会社 〒105-0014 東京都港区芝2-5-10 TEL:03-5418-8230 / FAX: 03-5418-8238
※平成27年1月より社名変更いたしております(旧社名:エルコライティング株式会社)。

CONTENTS

ブロック報告

2	[北海道] 鑑賞者が求めるもの 泉 沙希
4	[東北] 青森県の5館連携事業 鷲田めろろ
6	[関東] コロナ禍2年目の美術館活動 井澤英理子
8	[東京] 「コロナ禍」は美術館の転換点となるか? 関 昭郎
10	[北信越] 新しい県立美術館の開館 田中正史
12	[東海] 杉本美術館の閉館 村上久美
14	[近畿] 長引くコロナ禍 近畿の美術館・博物館の今 坂上義太郎
16	[中国] コロナ禍に翻弄され、大規模改修工事による休館中に思うこと 角 奈緒子
18	[四国] 再開した香川のミュージアムを訪ねて 塚本麻莉
20	[九州] 美術館の「自力」と「地力」 野中耕介

部会報告

22	—— 保存研究部会 盛本直美、邊牟木尚美
23	—— 教育普及研究部会 吉澤菜摘
24	—— 情報・資料研究部会 鴨木年泰
25	—— 小規模館研究部会 高橋幸広
26	—— 美術館運営制度研究部会 安田篤生
27	—— 地域美術研究部会 藤崎 綾

賛助会員各社 28

事務局から 29

編集後記 31

投稿要領 32

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 32

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.21 2022年2月1日発行 ©(一社)全国美術館会議

[編集] (一社)全国美術館会議広報委員会

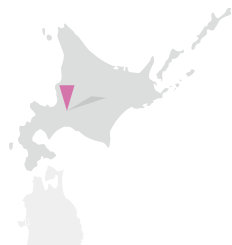
[発行者] (一社)全国美術館会議 〒102-0082 東京都千代田区一番町6-3-103 TEL 03-6272-8555

[デザイン] 宮谷一孝 [印刷] 日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3

ISSN 2186-7259

鑑賞者が求めるもの

泉 沙希 (いずみ さき・安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄)



2021年の年明け、当館がある美唄市では例年以上の積雪で、毎日のように除雪に追われた。その雪がとける頃、当館では企画展「こころを彫ること」(4月21日～5月10日)を開催した。昨年は開催予定期間に臨時休館となったため、中止として、「今年こそは」と臨んだ展示である。今年は休館にこそならなかったが、ボランティアスタッフの参加中止や行動展示の取りやめなどの対策をとり、それに伴って、一部展示内容や予定していたプログラムの変更を余儀なくされた。常設展示では、鑑賞の際に触れてよいことが特徴の一つである安田侃の彫刻に「触れることはお控えください」とアナウンスすることが続いていた。美術館としては、引き続き、制限を設けての鑑賞空間の提供をせざるを得ず、鑑賞者としては、思うように展覧会に足を運べない日々が続くだろう、と改めて予感させるシーズン入りであった。

今期は、いつどのくらいの期間で臨時休館になるか、どんなかたちで鑑賞者を受け入れられるか、予測不能な状況下で、どの館も工夫をしながら展覧会を準備、開催されたことと思う。鑑賞者に寄り添い、常連さん以外の集客も期待できるような内容の展覧会が多かった中、特に話題になったのは、2019年春に東京・府中市美術館で開催された「へそまがり日本美術 禅画からヘタウマまで」(北海道立近代美術館、7月17日～9月1日)である。府中市美術館以外への初めての巡回展として開催され、展示概要には、「中世の水墨画から現代のへ

タウマ漫画まで、日本人の『へそまがりな感性』が生んだ絵画の数々を展望します」とあり、見れば吹き出してしまうような「ゆるい」「へんてこ」とも表現される作品が並んだ。各キャプションには、時代や作家の背景などの紹介と併せて、へそまがりポイントを伝える解説があったり、「比べてみよう」として、いわゆる正統派な作品と「へそまがり」な作品を並列させた展示方法だったり、予備知識がない者も最後まで飽きる(または挫折する)ことなく、親しみを持って作品に接することができるような工夫がみえた。また、公式ホームページで公開されていた『「へそ展」日記』では、オンライン上で展示の裏側や作品のポイントなどを知ることができた。府中市美術館での開催から続く、肩肘張らない内容の日記は、行く/行かないと迷う読者の背中を押し、会場への集客に役買っていたように思う。

一方で、「放浪の天才画家 山下清」展(北海道立旭川美術館、9月18日～11月23日)や「水木しげる 魂の漫画展」(北海道立帯広美術館、10月9日～12月19日)など、誰もが知るテーマを扱った展覧会も目立った。「知っている」ということは、安心に繋がり、長く慣れ親しんだものの、昔から好きだったものに触れることは、癒しにもなる。真偽不明の新しい情報が溢れ、緊張状態の続く昨今、肩の力を抜いて向き合える作品が並ぶ展覧会は、東の間、鑑賞者の心を緩めたのではないだろうか。

少しずつ世の中が動き出し、紅葉が見ごろとなった頃、北海道札幌市と石狩市を拠点として活動す

る作家・佐藤武の個展「札幌美術展 佐藤武」(札幌芸術の森美術館、10月9日～2022年1月10日)を鑑賞した。夢とも現実ともつかないような、無人の都市風景や遺構を描いた作品が代表的であるが、本展では鮮やかな色彩を用いた初期の作品から、上空を切り裂く一線を描く最新作、また絵画にとどまらず、立体作品や写真も展示された。今もお精力的に活動し、今の時代を生きる作家の作品と対峙すると、じわじわと身体が暖かくなるような感覚を持った。思考を重ね、苦しみ抜いて確かな何かを掴み、それを熟成させて、さらに新しい世界を広げていく…作品を通してその人生を迫体験し、内側にある作家の熱に触れることができた。そして、なにかと雑音の多い生活環境の中で小さな画面を覗くのではなく、自ら足を運んで作品世界の中に飛び込み、どっぷりと浸ることがどんなに人の心を揺らし、満たすことかを思い出した。

人流抑制のために自治体が長く続けた利用制限が解かれた今、当館には北海道内外から鑑賞者が訪れてくださるようになった。「ずっとここに来たかった」という心からの声を聞くことが多く、それを証明するように以前よりもゆっくりと時間をかけて過ごす方や帰り際に「また来ます」と名残惜しそうに言われる方も増えている。筆者も先述の展覧会で体感したように、鑑賞者は改めて美術館の場の力を肌身で感じ、それを味わう時間をより大切にしている。作品に会えない日々と比例するように、鑑賞者の感覚はどんどんと研ぎ澄まされているかもしれない。この号が発行される頃、世の中がどのようになっているだろうか。だんだんと「身構え方」がわかってきたとは言え、各館での試行錯誤は続いているだろう。そんな中でも、鑑賞者が求めるものを想像しながら、知性と感性を刺激する場として、美術館ができること、やるべきことを考え続けたい。



北海道立近代美術館「へそまがり日本美術 禅画からヘタウマまで」会場風景
写真提供：北海道立近代美術館



札幌芸術の森美術館「札幌美術展 佐藤武」会場風景 筆者撮影

青森県の5館連携事業

鷲田めるろ (わしだ めるろ・十和田市現代美術館)

2021年は東日本大震災から10年目にあたる。青森県立美術館では、震災10年を機にグループ展「東日本大震災10年 あかし testaments」(10月9日～2022年1月23日)が開催された。しかし、2021年度上半期も2020年度に続き新型コロナウイルス感染症の影響が大きく、震災の影響は今なお続いているにも関わらず、震災はコロナ禍の向こうに霞んでしまった。2021年4月から9月にかけて各地で緊急事態宣言が発令され、十和田市現代美術館でも2021年9月に1ヶ月間の臨時休館を余儀なくされた。移動自粛のため、私自身、青森県以外の各美術館を訪れることもままならなかった。本稿では、青森県内の5館が進めている連携事業について報告したい。

2020年7月に弘前市に開館した弘前れんが倉庫美術館(2020年度より全国美術館会議新規正会員)に続き、2021年11月3日には八戸市美術館がリニューアルオープンした。青森公立大学国際芸術センター青森(ACAC)、青森県立美術館、十和田市現代美術館とともに東北ブロック正会員34館のうち青森県内の5館が連携してゆくことになった。2020年7月、「青森アートミュージアム5館連携協議会」が設立され、青森県立美術館に事務局を置いて共同事業を開始した。同年11月には同協議会のウェブサイトを開設(<https://aomorigokan.com/>)。5館の展覧会やイベント情報を一覧できるようにし、来館者の他館や周辺地域への周遊を促そうとしている。青森県は、首都

圏など人口の多い地域から新幹線でも3時間ほどかかる。単館だと行くことを躊躇してしまうところを、複数一緒に見られることをアピールし、来訪してもらいたい。

2021年2月には青森県立美術館でシンポジウムを開催し、5館が共同で企画する展覧会など、今後の連携の可能性について意見交換を行い、YouTubeでもライブ配信を行った。

2021年度は「建築」を連携の共通テーマに定めた。5館は安藤忠雄(ACAC)、青木淳(県立美術館)、西沢立衛(十和田)、田根剛(弘前)、西澤徹夫建築事務所・タカバネスタジオ設計共同体(八戸)といった世界的に活躍する建築家による設計であり、レジデンス、まちづくり、リノベーション、ラーニングなど、この20年間に日本の美術館やアートセンターが向き合ってきた新しい機能やビジョンが建築に反映されている。来館者に美術館建築にも着目してもらうとともに、建築ファンにも訪れてもらいたいと考えた。青森県立美術館では、5月から2022年1月にかけてコレクション展の一角で、青木淳による同館の模型やアニメーションといった資料、鈴木理策が撮影した同館の写真を展示する特集展示を行った。その他各館で建築家によるトークイベントや建築ツアーを実施している。十和田市現代美術館でも西沢立衛へのインタビューを行い、ウェブで公開した。さらに2022年3月のリリースに向け、ウェブサイトを通じて長期的に発信する建築のコンテンツの準備も進めている。

2020年7月に開幕した十和田市現代美術館の企画展「インター+プレイ」(7月23日～8月29日)に出品した松原慈は、3月から8月まで国際芸術センター青森に滞在して十和田の出品作品を制作した。また、国際芸術センター青森で2020年秋のアーティスト・イン・レジデンス・プログラムに参加したダンサー・神村恵は、同年12月に十和田市現代美術館の展示室でレクチャー・パフォーマンス《引力のダンス》を行った。このようにアーティスト・イン・レジデンスと展示という各館の機能を組み合わせる連携も可能だろう。また、いずれの館も大規模ではないので、スタッフ数は限られてしまう。弘前れんが倉庫美術館と十和田市現代美術館は、共にエヌ・アンド・エー株式会社が運営に携わっているため、一人のテクニカル・ディレクターが両方の美術館の展示設営に関わっている。さらに広報連携や、ラーニング担当の勉強会も共同で行っている。このような専門的人材の連携も今後探ってゆきたい。

5館のうち博物館法施行規則で博物館実習を受

け入れることができると定められた(第2条)「登録博物館」・「博物館相当施設」は青森県立美術館と八戸市美術館のみである。指定を受けていない十和田市現代美術館でも大学側が認めた場合、実習の受け入れを行なっている。まちづくりに対して果たす美術館の役割に関心を持った大学生など全国からの応募があり、そうした実践も含めた実習を行ってはいけるものの、収蔵庫を持たないために基本的な実習を十分に行えてはいない。2021年度上半期にも、文化庁の文化審議会博物館部会において博物館登録制度と学芸員資格制度を焦点に博物館法改正についての議論が進み、全国美術館会議でも6月から8月にかけてオンライン勉強会や各館へのアンケートが実施された。今後、機能の異なる5館を横断した博物館実習プログラムを開発することにより、収集・保管、展示・教育、調査・研究といった従来の業務に加えて、社会や地域の課題にも向き合う、新しい時代に即した学芸員や美術館スタッフを養成する可能性も生まれるだろう。



11月3日にリニューアルオープンした八戸市美術館



5館連携ウェブサイトのQRコード

コロナ禍 2 年目の美術館活動

井澤英理子（いざわ えりこ・山梨県立美術館）



2021 年度上半期もコロナ禍の影響を受けながらの運営となった。県外への移動制限により県外の美術館訪問、展覧会観覧がままならず、この報告も各館ホームページに多くを依存していることをお許しいただきたい。

3 月以降、感染者数は徐々に増加し、4 月 16 日から神奈川県、埼玉県、千葉県にまん延防止等重点措置、同 25 日から東京に緊急事態宣言が発出された。昨年度は全国で多くの美術館が休館したが、今年度春先は感染予防対策を講じることで美術鑑賞は感染リスクを抑えることができ、むしろこのような社会状況においてこそ芸術文化に触れることが喜びや癒やしになるとの考え方が広く受け止められつつあり、加えて 6 月に全国美術館会議より「新型コロナウイルス禍の状況下における美術館の開館について」の意見が表明されたことから、7 月まではほとんどの美術館が開館、企画展開催を継続した。ただし群馬県は県独自の社会活動ガイドラインに従って県立美術館 2 館が 5 月 16 日から 6 月 14 日まで休館している。その後 7 月下旬からの感染者増加の勢いはすさまじく、神奈川県、埼玉県、千葉県に 7 月 30 日から緊急事態宣言、茨城県、群馬県、栃木県に 8 月 8 日からまん延防止等重点措置、続いて 8 月 20 日から緊急事態宣言が発出、山梨県にも 8 月 20 日からまん延防止等重点措置がとられた。これに伴う 8、9 月の対応は県の方針によって大きく分かれ、神奈川県、埼玉県、千葉県、群馬県は開館し、茨

城県、栃木県、山梨県の主な公立館は休館した。休館期間は発出時期や各県ガイドラインに合わせてまちまちであったため、参考に各県立美術館の休館期間を以下に挙げる。茨城県立近代美術館 8 月 18 日～9 月 12 日（～10 月 1 日 芸術祭準備のため休館）、栃木県立美術館 8 月 23 日～9 月 30 日、山梨県立美術館 8 月 8 日～9 月 12 日。

具体的な動向の一例を紹介すべく、山梨県立美術館の状況を報告しておきたい。感染予防対策は昨年度から引き続き、出入口を 1 ヶ所に絞り、入館時に検温、消毒、連絡先記入を徹底、展示室は面積と導線距離から割り出して上限を設けているが、通常は制限人数を超える心配はほとんどない。ただし春期特別展は極めて集客力の高い「テオ・ヤンセン展」（4 月 24 日～6 月 22 日）であったため、オンライン事前予約システムを導入した。キネティックアートであるヤンセンの魅力を実感できるように展示室で行う 30 分間の「リアニメーション」が本展の見所の一つとなっていた。展示室は 4 室に分かれているが、実演時にはその部屋に観覧者が集まってしまうため、結局実演する部屋の収容人数を上限とせざるをえなかった。入館を 40 分ごと 14 区分し、各区分 40 名、都合 560 名が 1 日の観覧者数上限となった。実演観覧場所では床に 1 メートル間隔で印を貼り三密を避ける工夫を施した。夏季「蜷川実花展—虚構と現実の間に—」（当初は 7 月 10 日～8 月 29 日を予定）は入口で入場制限をすることで対処していたが、それ

まで感染拡大が抑えられていた山梨においても感染者数が急増したため、県独自の臨時特別協力要請により美術館を含む県立文化施設が 8 月 8 日から休館、20 日にはまん延防止等重点措置となったため再開することなく閉幕となった。その後 9 月 12 日に措置が解除、美術館活動を再開した。なお普及事業は、講堂で行う講演会や映画会などは収容人数半数 60 名、ワークショップ室で行う造形系プログラムは作業テーブルの数にあわせ 8 組（各 2～6 席）、展示室内のギャラリートークはマイクとイヤホンを使い 5 名までに制限している。毎夏恒例の参加型展覧会「みんなで作る美術展」（会期を延期して 9 月 14 日～10 月 3 日）は、「自分のための巣」を「ホームワーク」として自宅で制作、搬入して展示、もしくは作品を撮した写真を展示するという手法により、リアルとオンラインで展開を図った。

最後に、関東ブロック美術館の動向を少しばかりご紹介する。ハラミュージアムアークは、1 月に閉館した原美術館と統合され、奈良美智、宮島達男、森村泰昌の人気常設作品も引き継ぎ、「原美術館 ARC」として 4 月にリニューアルオープン、開館記念展「虹をかける：原美術館 / 原六郎コレクション」（春夏季 4 月 24 日～9 月 5 日、秋冬季 9 月 11 日～2022 年 1 月 10 日）を開催した。横浜美術館は大規模改修工事のため昨年度末から 2023 年まで休館、工事のため作品を点検、輸

送する様子をウェブ配信、秋からは「休館中も活動中」と銘打ち仮拠点や出前でプロジェクトが活動する。川崎市民市民ミュージアムは休館中活動として川崎市内公立施設を借りて特別展を、オンラインで講座やイベントを開催している。ホームページでは 2019 年の浸水被害状況とその後の救出、処置など収藏品レスキューを報告し続けており、今年度 9、10 月には「救う過去、つなぐ未来—川崎市民市民ミュージアム被災後活動報告展—」を開催した。群馬県立館林美術館は開館 20 周年記念展「水に浮かぶ島のように—群馬県立館林美術館の 20 年」（4 月 24 日～5 月 15 日）、神奈川県立近代美術館は 70 周年に「空間の中のフォルム—アルベルト・ジャコメッティから桑山忠明まで—」展（4 月 24 日～9 月 5 日）、平塚市美術館は開館 30 周年記念展「The Gift 寄贈を受けた作品選 + 新収藏品展」（7 月 3 日～10 月 24 日）、清里フォトアートミュージアムは、開館 25 周年記念展「細江英公の写真：暗箱のなかの劇場」（7 月 17 日～12 月 5 日）を 1 年遅らせて開催した。収蔵作品選の企画展は館の魅力や個性を強くアピールするとともに、コロナ禍で休館になっても延期可能でダメージも比較的少ないため、リスクを抱えながらも積極的に PR したい周年記念に最適といえる。日頃の収蔵品の充実、研究の蓄積が館の底力となることを痛感するコロナ禍である。



美術館入口で来館者に検温、消毒、さらに奥に進んでにチェックシート記入をお願いしている。



テオ・ヤンセン展 リアニメーションの様子

「コロナ禍」は美術館の転換点となるか？

関 昭郎 (せき あきお・東京都写真美術館)



緊急事態宣言の解除から1ヶ月も経つと空気感も変わってしまっているが、2021年度上半期のトピックと言えば、やはり「コロナ禍」を挙げざるを得ない。私事から話を始めるのは恐縮だが、筆者が企画した「新・晴れた日 篠山紀信」展も、当初、5月18日からの開催予定が、緊急事態宣言で5月末日まで休館となった。当然、オープンしてからも、通常通りと言う訳にはいかなかったが、作家が積極的にメディアへの出演要請に協力してくれたこともあり、入館者はじわじわと伸びてきていた。しかしながら、7月12日から4回目の緊急事態宣言が出されたことで、入館者は前週比で2割以上も下降し、勢いをくじかれることになった。「災害級の危機」と言われた第5波の期間は、日々、新規感染者数が激増し、緊張度を高めていった。そのなかで、最終日まで、閉館に至らなかったのは幸いと考えべきだろうが、それまでに費やした時間を考えるとより多くの人に見てもらいたかったという気持ちは拭いがたい。

とは言え、筆者自身もこの期間は他館の展覧会に足を運ぶことを極力、控えていた。特に都外の展覧会は、関心があっても行くことをあきらめざるを得なかった。それゆえ、本稿が「東京エリア」を謳いながら、都内の限られた事例のみを取り上げている点については、ご容赦いただきたい。

多くの美術館は、この時期、相当に深刻な「コロナ禍」の影響を受けた。静かな鑑賞環境は美術館の一つの望ましい姿でもあるのだが、それを普段、

多くの観客を集める人気の美術館で体験することは、空恐ろしい気持ちになった。

一方で、いくつかの展覧会は多くの観客を集めた。国立新美術館の「ファッション イン ジャパン 1945-2020—流行と社会」(6月9日～9月6日)は、予約が入れられないほどの人気であったと言う。同展と同じように、早々と会期終盤までの土日の予約が埋まってしまったことが話題となったのが21_21 DESIGN SIGHT「ルール?展」(7月2日～11月28日)であった。テーマの明快さと共に、ポストドラマ演劇の一つの手法を思わせる工夫が見られるなど、それぞれの作品/プレゼンテーションに説得力があった。この二つの展覧会は、若い世代を中心にSNSで話題になっていたらしい。「コロナ禍」にあって20代前後の若い観客層の存在感はかなり高まったように思う。

我が東京都写真美術館の入館者は、例年、男女比がほぼ同数で、50代以上が半数を占めている。年齢の高い世代が入館者の中心である事は、多くの美術館に共通しているが、男女比がほぼ同数というのは、かなり特徴的に思われる。しかし、この出控えを余儀なくされた2年間を支えてくれたのが、意外なことに女性を中心とした若い世代であったのである。

筆者は、東京都庭園美術館に籍を置いた2013年から、2014～2018年度のリニューアルに向けた展覧会を含めたプログラムを組み立てる機会を得たが、そこでは、それまで同館の中心的存在であつ

た観客とは異なった関心を持つ新しい観客層を呼び込むことが不可欠と考え、これを試みた。そのために、内藤礼、オットー・クンツリ、クリスチャン・ボルタンスキーという現代作家の個展を年1回行い、美術館では取り上げにくかったパフォーミング・アーツのシーンを紹介するプログラム「TTM: IGNITION BOX」を組み込んだ。これらの試みは、渋谷につながる目黒と言う地域性もあって、比較的、短期間で観客の後押しをもらうことができた。

ただ、課題も残した。予想されていたことではあったのだが、展覧会によって、以前からの観客層と新しい観客層がはっきりと分かれてしまったことだ。一定のマジョリティーを得るためには、戦略的なターゲティングは重要だが、それ以上にリピーターを作っていくことが大切だ。しかし、これはやはり時間のかかることである。

その点で、近年、西洋と日本のそれぞれのジャンルで、密度の高い展覧会を続けている練馬区立

美術館の「電線絵画展—小林清親から山口晃まで—」(2月28日～4月18日)が、この時期にして賑わっていたのを意外とは感じなかった。展示には、画家の視点や表現の多様さなど、絵画の楽しさが詰まっていた。同様に、東京都現代美術館の展覧会も、その規模と充実度の高さに「コロナ禍」を感じさせないほどの観客を集めた。筆者が訪れたのは、「マーク・マンダース—マーク・マンダースの不在」(3月20日～6月22日)と「GENKYO 横尾忠則 原郷から幻境へ、そして現況は？」(7月17日～10月17日)の期間だが、「マンダース」の期間は、同時期に行われたライゾマティクスが集客数を担っていたのかもしれないものの、いずれも幅広い世代のリピーターたちであろうと思われる姿が目についた。やはり継続は力なのであろう。

それでも「コロナ禍」の経験は、入館者層の交替を加速させる可能性を孕んでいる。そのためには、美術館が考えなければならないことは多そうだ。



東京都写真美術館「新・晴れた日 篠山紀信」第1部会場風景

新しい県立美術館の開館

田中正史 (たなか まさふみ・長野県立美術館)



前号に引き続き、「北信越ブロック」の欄で自館を取り上げ、2021年4月に改築オープンした長野県立美術館の概要について述べることをお許しいただきたい。

長野県立美術館の前身である長野県信濃美術館は、1966年に開館して以来、1990年には東山魁夷館を併設し、長野県で唯一の県立美術館として、県内の芸術・文化の振興に中心的な役割を担ってきた。しかし、開館から50年もの歳月を経ると、設備や機器の老朽化により、バリアフリーへの対応なども困難になったため、本館を全面的に建て替え、東山魁夷館を部分的に改修した上で、館の運営指針や、作品の収集方針についても見直しを行い、2021年4月、長野県立美術館と名称も改めて生まれ変わったのである。

新しい美術館のオープンは、隣接する善光寺の御開帳に合わせて2021年4月に設定され、「長野県立美術館完成記念 未来につなぐ～新美術館でよみがえる世界の至宝 東京藝術大学スーパークローン文化財展」(4月10日～6月6日)の開催で始まることになった。結局、コロナ禍のために善光寺の御開帳は1年後に延期となったが、新しい美術館は予定どおりに開館。この展覧会は東京藝術大学によって確立された、「クローン文化財」あるいは「スーパークローン文化財」の技術と成果を紹介する内容であり、今回の長野での展示は、アフガニスタンのバーミヤンや、中国のキジルや敦煌といった石窟寺院から法隆寺金堂の釈迦三尊像に至

るまで、仏教東漸の跡を記すテーマに焦点を絞ることにした。

美術館の新築オープンにあたって、「クローン文化財」を展示したのは、この時点で、建物のコンクリート打設から二夏を経ておらず、いわゆる「美術作品」の展示には、保存的な見地からの環境の保全に不安があったためである。また、そのような時期に、周囲の環境までもを含めて精密に復元する最新技術を紹介することで、近年の地球温暖化による気候の急激な変化や地域紛争の激化によって存亡の危険にさらされている文化財の保護と公開の問題に対し、「美術館」という施設の存在意義から考え直す機会としたいという思惑もあった。幸いに、そのような意図は観覧者の方たちにも理解されたく、概ね、好評のうちに最終日を迎えることができた。

そのあとは、新しい美術館の設計を担当した建築家・宮崎浩氏が、県民をはじめ多くの関係者との対話を通じて、開かれた美術館の完成を目指した過程を、図面や模型や部材の展示で紹介した「長野県立美術館メイキング・ドキュメント つながる美術館 宮崎浩とランドスケープ・ミュージアム」展(6月19日～8月15日)、新しい美術館のスタッフユニフォームのデザインを手がけ、ファッションブランド「Mame Kurogouchi (マメクロゴウチ)」で、2018年よりパリでコレクションを発表している長野県出身の黒河内真衣子氏の創作の魅力を紹介する「10 Mame Kurogouchi」展(6月19日～8月15日)、さらに、近年の飛躍的な技術進歩により、多

くの映像作家や写真家のインスピレーションの源となっている宇宙観測技術をテーマとし、宇宙航空研究開発機構(JAXA)の人工衛星「だいち」が撮影した長野県の高精細画像をもとにした映像作品を関連作品とともに展示した「めぐりあい JAXA ーながのとながめ」展(6月19日～8月15日)と、三つの展覧会の同時開催を経て、いよいよ夏の終わりの8月28日から「長野県立美術館グランドオープン記念 森と水と生きる」展(8月28日～11月3日)の開催へと至るのである。

この時期には、展示室の環境も十分に整い、文化庁から国指定の重要文化財を展示する許可も下りていた。

長野県は豊かな森林と清流が織りなす雄大な自然に抱かれた、日本を代表する山岳県であり、森林県であることから、長野県立美術館のグランドオープン記念である「森と水と生きる」展では、自然と人間が共存してゆく中で生み出されてきた、近代から現代までの絵画、彫刻、写真、インスタレーションなどを、各地の美術館から拝借した作品と、所蔵コレクションの中から選りすぐった作品で紹介する内

容となった。今日の生活と美術と自然との関係に焦点を当てた展覧会として、長野県で唯一の県立美術館のグランドオープン記念にふさわしい展示ができたのではないかと考えている。

なお、新しい長野県立美術館においては、新たに所蔵作品を常設するコレクション展示室や、視覚以外の感覚も使った鑑賞が可能なアートラボ、委託制作した映像を紹介する交流スペース、作家の滞在制作を想定したオープンギャラリー、アートライブラリーなど、旧館には無かった施設も整備され、中谷芙二子氏による《霧の彫刻 #47610 - Dynamic Earth Series I -》や、富長敦也氏による《Love Stone Project- Nagano》など、入場無料エリアにおいても楽しめる作品が設置されていることも特色といえるだろう。

また、和を基調とした演出を取り入れながら、イタリアンとフレンチのメニューを提供している「ミューゼ レストラン 善」と、長野県産食材を使った軽食やドリンクを提供する「Shinano Art Café」、さらに、開放的な空間のミュージアムショップなど、商業利用のスペースについても充実を図っている。



長野県立美術館本館の外観

杉本美術館の閉館

村上久美 (むらかみ くみ・メナード美術館)



10月31日、杉本美術館が閉館した。1987年4月の開館以来、その活動は34年におよぶものだった。

杉本美術館は名古屋を中心に活動した洋画家、杉本健吉(1905-2004)の作品を展示するために、名古屋鉄道株式会社(名鉄)が愛知県美浜町に設立した美術館である。

その閉館を報道する7月27日の中日新聞「地域経済」面の記事には、「集客苦戦／社会貢献に限度／株主配慮」という見出しが付けられ、近年の入館者減少にコロナ禍が拍車をかけた事態を伝えていた。

最終展は9月16日から「絵に生きた画家 杉本健吉」と題して始まった。開幕まもない頃の平日に同館を訪れたが、美術館との別れを惜しむ人たちが大勢足を運んでいた。

展示作品は若き日の自画像や師事した岸田劉生の影響濃い静物画に始まり、画家を代表する牡丹図や奈良大和路風景に、何度も訪れた韓国や中国だけでなく、ヨーロッパ、ニューヨークなど世界各地を旅して描いた素描、水彩、油彩の数々がみられる。その筆の動静には、「生まれる絵をあこがれます」との言葉を残している画家の心そのものを感じる。さらに、その名を広めた『新・平家物語』挿絵屏風、《両界曼荼羅》、やきものやユニークな言葉を含んだ幡といった造形物まで、多種多彩な世界が示されていた。それは、最終展にあたって特別な趣向を凝らすものではなく、作品そのもので杉本健吉という画家の生きざまと魅力を伝える、これ

までのスタイルが通された展示だった。

なかには、観光ポスター原画や、名鉄電車・市営地下鉄の色にまつわるエピソード等も紹介され、画家が手掛けた多数の図案の仕事に昭和の懐かしい風物を思い起こした。思えば、当メナード美術館にも「マリーニを見に来た」と突然の訪問が何度かあったように、この地域には画家との交流や間接的な思い出のある人も少なくないだろう。定期的に開催される杉本美術館の企画展ポスターを通勤通学の名鉄の駅や電車内で目にする機会もあったはずだ。地域社会に浸透していた杉本健吉の画業とそれを伝える美術館の存在を改めて認識した。

今後の建物とコレクションの保管について、現在(2021年10月31日)、正式に発表はされていない。必要な時を経て、9,000点にもなるコレクションが適切に管理され、再び人々の目を楽しませてくれる日を待ちたい。

1987年の愛知県では、名都美術館(のちに場所を移転)、杉本美術館、メナード美術館が開館し、徳川美術館には新館が設けられた。前後で開館した公立、私立美術館も多く、日本経済の順調さを示すように全国的に美術館の開館があった頃である。

はなはだ偏って恐縮だが、2021年夏に自身が訪れた名古屋市周辺の私立美術館の展覧会を簡単にお伝えしたい。

○ヤマザキマザック美術館「名古屋城からはじま

る植物物語」(4月24日～8月29日)

名古屋城本丸御殿の天井板絵にはじまり、東山動植物園が所蔵する本草学や虫魚に関する江戸時代の資料を丁寧に紹介しながら、同館が所蔵するエミール・ガレのガラス作品を併せて展示し、ジャポニズムやアール・ヌーヴォーへの流れをみせた印象的な展覧会だった。

○古川美術館では、開館30周年記念特別展「印象派とエコール・ド・パリ」(9月10日～12月19日)と、「スイスで咲いた 横井照子展」(9月10日～10月31日)を開催。本館と分館の為三郎記念館、個性の異なる二つの会場を使い分けての展覧会の開催と、多彩なイベントやカフェの運営によって、地域に愛される美術館づくりという個性が打ち出されている。

○名都美術館「美の装い 表具展 絵画を活かす伝統の技」(10月8日～12月5日)

日本画を専門とする同館では、今回は、軸装や屏風の表具に焦点を当てた。とりわけ現代的な感

覚の表具によって、日本画との距離感を近くしたいという想いを感じるものだった。

○徳川美術館の特別展「刻を描く 田淵俊夫」(4月18日～5月30日)

近世大名家の美術文化を主とする同館で現代日本画展が行われたのは、1935年の開館以来初めてのことであり、新しい扉が開かれた。メナード美術館「田淵俊夫と日本画の世界 美をつなぐ」展(4月18日～8月29日)と開幕日を揃えて開催されたもので、前年の緊急事態宣言による休館措置のため、1年延期しての実現となった。

県内には30年以上の歴史を持つ美術館も多くなり、規模も状況も異なりながら、各館の個性を明確に活動している。共に年月を歩んできた美術館の一つが閉じる一方で、11月には、歌川広重の版画を所蔵・公開するUFJ貨幣資料館が名古屋市中心部に場所を移してリニューアル・オープンする予定だ。アフターコロナに向って、愛知のミュージアムも歩みを進めている。



杉本美術館外観



杉本美術館展示室 杉本美術館提供

長引くコロナ禍 近畿の美術館・博物館の今

坂上義太郎（さかうえ よしたろう・BB プラザ美術館）



コロナ禍の生活も早や2年が過ぎた。美術館・博物館は、展覧会の中止や延期など、館運営の自粛や制限が求められた。多くの館が、今も入館者数の制限や来館事前予約などの対応を余儀なくされている。2021年度上半期の近畿ブロック加盟館の活動から所感を述べたい。

滋賀県立美術館が約4年間の休館を経て昨年6月に「Soft Territory かかわりのあわい」（6月27日～8月22日）でリニューアルオープン。先ず館名から従来の「近代」を外した。

昨年3月から約12億円をかけ展示室の改装。美術館の前庭を芝生に一新し、エントランスにはカフェ、2階にはキッズスペースを新設。新生美術館は、三つの美〈神と仏の美〉〈近代・現代美術〉〈アール・ブリュット〉を収集や展示の柱として、滋賀ゆかりの新世代のアーティストを支援する「フレッシュなミュージアム」へ舵を取るという。

障がい者アートでは、兵庫県立美術館が1989年から触覚で作品鑑賞できる企画を毎年続けている。今年は、皮膚や毛穴、体毛まで精巧に動物の頭部へ造形化している東影智裕の作品を展示する「美術の中のかたち—手で見る造形 東影智裕展 触知の森」（7月17日～9月26日）。作品は、何れもエポキシ樹脂による1点物の造形。目の不自由な人や健常者にアイマスク着用で触って感じて貰う展示も今回で31回目。関係者の努力に敬意を表したい。

さて私は、以前より気に留めていた和歌山県立近代美術館ニュース（季刊誌）へ2018年から連載の

「保存の話をしよう」について、先日執筆者へ尋ねた。「以前から学芸員がIPM（総合的有害生物管理）の方法を学び、代々のコンサルタントの提言や資材と器具の生産元からの様々な技術の提供、研修を受けるといった取り組みを今も続けています」と話す。そんな保存環境の見直しや改良などの整備内容をレポートして3年を超える。美術館の作品・資料保存の科学的な視野によるレポートシリーズは大切な情報発信といえよう。今後の連載が待たれる。

最近、2、3の美術館で内外の美術工芸部門の展覧会が目に残った。奈良県立美術館の「ウィリアム・モリス 原風景でたどるデザインの軌跡」（6月26日～8月29日）は、写真家・織作峰子が撮影したモリスに因む風景写真と組み合わせた展示で、多くの女性が熱心に鑑賞する姿が目についた。同館では続いて9月下旬から奈良出身の彫工・森川杜園の奈良人形（一刀彫）や名宝の模作などを紹介している。

1963年に開館の京都国立近代美術館は、活動の柱の一つに工芸を据えており、京都ゆかりや海外の工芸作家の作品を多数収蔵。「モダンクラフト クロニクル—京都国立近代美術館コレクションより—」（7月9日～8月22日）では、工芸コレクションを活用し、これまでの展覧会「現代国際陶芸展」、「現代の陶芸—アメリカ・カナダ・メキシコと日本」、「今日の造形〈織〉—ヨーロッパと日本」、「現代ガラスの美—ヨーロッパと日本」などをダイジェストした構成だった。国内有数の工芸コレクションを形成している成果を垣間見た。

兵庫陶芸美術館の開館15周年記念特別展「No Man's Land—陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先—」（3月20日～5月30日）もその一つだ。工芸だけでなく現代美術やデザインなどの幅広い分野から注目を集める国内の若手作家15名が、未来の陶芸表現を示唆する展示だった。

この館は、近年伝統陶芸を紹介するのみならず、今後の陶芸を革新していくであろう内外の作家を見いだしている。これからの伝統と革新を交差させる展開に期待したい。

また、関西で初の大規模個展を開いた二人の写真家が話題を呼んだ。西宮市大谷記念美術館の「石内都展 見える見えない、写真のゆくえ」（4月3日～7月25日）と国立国際美術館の「鷹野隆大 毎日写真 1999-2021」（6月29日～9月23日）だ。因みに二人は、木村伊兵衛賞を受賞している。何れも一瞬のシャッターで時間や記憶が投影されており、興味深い写真展だった。

次に数館の個性的な企画を紹介しよう。京都文化博物館の「さまよえる絵筆—東京・京都 戦時下の前衛画家たち」（6月5日～7月25日）。本展は板橋区立美術館との共同企画で、戦時下の東京と京都を中心に、前衛画家たちの苦闘の軌跡を取り上げた。戦時下に前衛美術の灯を消さなかった画家たちの作品や貴重な資料を検証する展覧会へ漕ぎ着けた関係者の労を多としたい。

他に、現下のコロナ禍へ果敢に活動する横尾忠則現代美術館に注目したい。「Curators in Panic—横尾忠則展 学芸員危機一髪」（3月27日～8

月22日）は、他館の企画展へ横尾作品の大半を貸し出したことで館から主要作品が消える非常事態を逆手にとった展覧会。担当学芸員3人が、各自25点ずつ作品を選び、各作品にコメントを寄せた。それは作品解説というより、個人的な思いやエピソードで、異色のキャプションだった。

更に、2020年7月にYouTubeチャンネルを開設し、オンラインイベントにも力を注ぐ。キュレーターズトークや横尾作品に呼応するパフォーマンスをYouTubeで公開。コロナ禍で館挙げての積極的な姿勢は今後も目が離せない。

最後は、BBプラザ美術館の「ジャック・ケルアック『オン・ザ・ロード』とビート・ジェネレーション 書物からみるカウンターカルチャーの系譜」（7月3日～8月8日）。展示の核は、ケルアックがタイプライターで執筆した36メートルに及ぶ『オン・ザ・ロード』のスクロールだ。だが、コロナ禍のため、アメリカからの搬送が叫ばず、実物大の複製を制作し、展示。ケルアックとアレン・ギンズバークやウィリアム・パロウズらと共に「ビート・ジェネレーション」と呼ばれた作家たちや日本での受容を資料と書籍で紹介。ビート世代の息吹を今に伝える展覧会として耳目を集めた。

今も各地域でアートによる街の活性化への企画が実施されているが、多くを知らないのどうぞ許容頂きたい。美術館・博物館もコロナ禍で人的交流が制限される状況下に、世界・都市・人と人との対話を芸術・文化を通じ、少しでも日常の活力を取り戻す不断の営為は、私たちの責務だろう。



横尾忠則現代美術館「横尾忠則展 学芸員危機一髪」会場風景
横尾忠則現代美術館提供



BBプラザ美術館
「ジャック・ケルアック『オン・ザ・ロード』とビート・ジェネレーション」
会場風景

コロナ禍に翻弄され、大規模改修工事による休館中に思うこと

角 奈緒子(すみ なおこ・広島市現代美術館)



2021 年の上半期も結局、コロナ禍に振り回され続け、移動も自粛を求められる時期となってしまった。新型コロナウイルス変異株が猛威を振るい、コロナに罹患するのも、知らないうちに拡散させてしまうのも、どちらも恐ろしいと思うがゆえに、ひとところじっとして過ごすしかなかった。しかも、広島を含む中国ブロックでいえば、広島県（さらに県内では当然、広島市）がもっともコロナ感染者数が多いこともあり、たとえ近隣他県であったとしてもさすがに気楽な移動は憚られる事態が続いた。というのは本稿で求められている趣旨と異なる文章となることへの言い訳でもあるが、ご容赦いただければ幸いである。

広島県では、「緊急事態宣言措置」でも「まん延防止等重点措置」でもない、県独自の「新型コロナ感染拡大防止集中対策」が取られたため、その対策期間中もさまざまな活動が制約された。筆者の勤務先である広島市現代美術館と同じく公立館で（管轄行政こそ異なるものの）、ご近所ということもあり、たびたび情報交換等を行う広島県立美術館では、4月20日から6月13日にかけて、呉市出身の洋画家、南薫造を紹介する大規模な回顧展「没後70年 南薫造」を開催。しかし、会期の途中から「集中対策期間」に、5月16日からは「緊急事態宣言」が発令される事態にまで状況は悪化。臨時休館中に会期終了を迎えてしまったため、緊急事態宣言が解除された翌日、6月21日から3日間限定で、特別観覧日を設け、展覧会の再開を待ちわ

びていた客を迎え入れた。さらに、2020年に開催を予定していたものの実現が叶わず2021年に延期、満を持しての開催となった「藤子不二雄^①展—^②の変コレクション—」（7月21日～9月26日）もまた、会期途中で臨時休館を余儀なくされ、緊急事態宣言の延長に伴い、こちらは展覧会の再開が叶わないまま8月6日に閉幕となってしまった。本展開催会期にあわせて、過去の藤子不二雄^③アニメをテレビ放映するという周到な広報戦略も立てられていた。このように、ある程度の集客を見込んだ展覧会を仕込んでいた美術館や共催者にとっては、2020年に引き続き打撃が大きかったと思われる。言うまでもないが同じ頃には、無観客とはいえ東京オリンピックが粛々と開催された。その様子をテレビで見ながら、違和感を覚えずにはいらなかった人も少なからずいたのではないだろうか。

では、広島市現代美術館はどうかというと、2021年1月から長期休館に突入している。1989年の開館以来、初となる大規模改修工事を執り行うためである（リニューアル・オープンは、2023年春頃の予定）。したがって今年度は、通常規模での展覧会を開催することはできない。コロナ禍にぐわえ、工事休館となると、ダブルで置いてけぼりにされているような気持ちにもなるが、見方を変えれば不幸中の幸いと言えるのかもしれない。当館の改修工事は、まず前提として、広島市の決定に従い事務所機能を美術館建物内に残したまま、つまり職員はこれまでどおり出勤し、収蔵作品も建物内で管

理した状態で進められている。美術館と建物周辺は工事区域で、職員はもちろん建物に出入りする人はみんな、ヘルメットの着用が求められる。収蔵作品の管理は非常にトリッキーだ。建物全体が工事の対象であるため、1ヶ所で保管し続けるわけにはいかず、途中、工区の切り替わるタイミングで作品を移動させなければならない。収蔵庫が使えない時期は展示室を閉め切って仮の収蔵庫として機能させ、そこで厳重に作品を保管している。こうした状況のため、改修工事期間中は作品貸出停止とせざるを得ない旨、改めてご理解いただきたい。

工事現場としての美術館で仕事するという「非常事態」に、思うところがないわけではないが、またとない機会でもあると捉え、積極的に利用することにした。例えば、京都を主な活動拠点とするアーティスト・グループのヒスロムとのプロジェクト。彼らは定期的に来広し、工事作業に伴い刻々と変化する

現場や建物の姿に呼応すべくアクションを繰り広げる。他にも、工事現場周辺に必ず出現する、侵入を規制する仮囲いフェンスを利用して、横山裕一の描き下ろしによる漫画を大きく掲出。また、広報担当主導によるInstagram「工事日記」では、美術館での出来事しからぬ、工事の（裏側の）様子を配信。現状においてこうした事業はむろん、美術館やアーティストの裁量だけでは実現できない。広島市の関係各課、建設JVはじめ工事関係者との調整、そして理解が必要となるわけだが、幸い今のところうまくいっていると思う。さらに、オフサイトとして、近所に建つアパートの一室に「分室」を開設し、映像上映や小展示、トーク等も企画。

大規模改修とコロナ禍、奇しくも重なった二つの非常によってもたらされた停滞は、美術館という組織の現実や限界を露呈するだけでなく、さらなる可能性の模索を促しているように思えてならない。



横山裕一：「実施しろ」「何をだ」比治山公園編、展示の様子



広島市現代美術館公式 Instagram #ゲンビの工事日記
https://www.instagram.com/2021_23_hiroshimamoca/

再開した香川のミュージアムを訪ねて

塚本麻莉(つかもと まり・高知県立美術館)



2021年4月から10月にかけては、御多分に洩れず四国のミュージアムも新型コロナウイルスの感染状況に振り回された。5月初旬から中旬はいわゆる「第4波」の感染者数がピークを記録。それが落ち着いたかと思えば6月下旬からは「第5波」が始まった。5波のピークにあたる8月中旬の1日あたりの新規感染者数は全国で2万5千人を数え、筆者が住む高知市でも8月27日から9月12日はまん延防止等重点措置が発出された。「まん防」を受けて、高知県立美術館では開催中の絵本作家・ミロコマチコによる大規模個展「いきものたちはわたしのかがみ ミロコ マチコ」のワークショップが中止となった。隣県に目をやっても、9月頃までは愛媛県美術館や徳島県立近代美術館の講座、ワークショップといったイベントは中止や延期が相次いでいる。

ただし、いま挙げた3館は6月以降、少なくとも臨時休館となることはなかった。最も辛酸を舐めたのは香川のミュージアムだ。たとえば高松市美術館では、本来8月29日までの会期を予定していた特別展「ゆかたと藍の世界」が感染症拡大防止のための臨時休館によって8月6日で実質的に打ち切られた。さらに同市は「まん防」措置が9月30日まで延長となったため、当初9月18日からの「大・タイガー立石展 変幻世界トラ紀行」の開幕も延期、10月1日にやっとのオープンを迎えた。こうした動きは高松市だけでなく香川県の公立館に共通しており、香川県立ミュージアムや丸亀市猪熊弦一郎現代美術館も同様の臨時休館期間を経て10月1日から一斉に

再開した。

前置きが長くなったが、本稿では10月以降に筆者が実際に訪問できた香川の3つの展覧会を概観する。長期にわたった休館の鬱屈を跳ね返すかのように、同地では魅力的な展覧会が多数開かれていたからだ。

まず、前述した高松市美術館の「大・タイガー立石展」(10月1日～11月3日)。本展は立石紘一、タイガー立石、立石大河亜という3つの名義を使って膨大なイメージを等価に扱い、絵画や漫画、陶彫など様々なジャンルで縦横無尽な創作を繰り広げた作家の大規模回顧展である。開幕日こそ延期となったものの、臨時休館中も美術館1階の外の通りに面したウィンドウに「出張展示」と掲げて立石の陶彫作品が置かれており、困難な状況下でも市民が作品に触れる機会を提供しようとする館の姿勢が印象的だった。また、本展のオマージュ展示として、アーティストの中野裕介／パラモデルによる特別企画が美術館と高松丸亀町商店街の同館ランチギャラリーで行われ、立石作品の独自解釈に基づく遊戯的なインスタレーションが展開された。館の内外に広がるスケールの大きい作品群を前に、筆者も実物と対面する喜びをしみじみと噛み締めた。

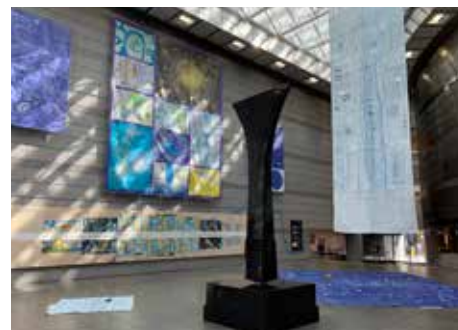
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の企画展「藤島武二と猪熊弦一郎展 サンプリシテとシンプル」(10月1日～12月5日)も、現地に訪れることでしか享受しえない「見て比べる楽しみ」に溢れた展覧会であった。本展では日本近代洋画を代表する洋画家の藤

島武二と、その教を東京美術学校で受けた同館が顕彰する丸亀ゆかりの画家、猪熊弦一郎の2人展である。ロマン主義的な洋画を模索した藤島と、具象や抽象といった枠組みに拘泥せず、長いキャリアのなかで絶えず画風を変化させた猪熊の作品から共通項を探るのは難しいように思われた。しかし、「サンプリシテ」と「シンプル」、すなわち単純化を切り口に2人の作品を壁面単位で併置させた時、西洋の古典絵画を参照し、卓越した画力をもって日本洋画を模索した藤島による「サンプリシテ」と、同時代の動向を次々取り込みながら独自の画境を拓いた猪熊の「シンプル」が、両者にとって描く対象の本質を掴むための鍵の概念であることが浮かびあがった。作家の言葉の効果的な引用や端的な解説キャプションがそうした気づきのフックとなったわけだが、物理的な作品と向き合い、比べて見ずしてこのことが納得できたかと言われると怪しい。

最後に触れておきたいのが、瀬戸内海歴史民俗

資料館の展覧会「藏本秀彦・水谷一美術展 国讃めと屍」(10月1日～12月19日)である。本展では、木造船や漁業関連資料から構成された民俗資料館ならではのダイナミックな常設展示を借景として、吹き抜け2階のギャラリーを中心に2人の現代美術家の作品が配されていた。特筆すべきは、「鎮魂」や「記憶」などのキーワードから着想したという静けさを湛えた2人の作品と、使用当時の活気をいきいきと伝える民俗資料群とが対比的な効果を生み、生と死の境が揺らぐかのような不思議な緊張感が空間に漂っていたことだ。本展はVRサイトでモニターからも鑑賞可能だが、個人的には資料や作品といったモノが持ち得る迫力があってこそその展示に思えた。

以上、四国で最も厳しいコロナウイルス感染症対策が取られた香川のミュージアムのうち、実見できた興味深い企画を取り上げた。ようやく開館した施設を訪ね、現場でモノを観るという体験のかけがえのなさを改めて痛感した次第である。



高松市美術館のエントランスホールの様子
中野裕介／パラモデル展「まTiGerの読み、いかReた押し絵」の展示風景



瀬戸内海歴史民俗資料館「藏本秀彦・水谷一美術展 国讃めと屍」会場風景

美術館の「自力」と「地力」

野中耕介（のなか こうすけ・佐賀県立博物館 佐賀県立美術館）

2021 年度前半期のブロック報告を仰せつかったが、話の軸となるのは、やはり新型コロナウイルス感染症との対峙の日々についてである。2020 年度の状況を振り返りながら、2021 年度前半期のことをお話ししたい。

私たち佐賀県立美術館は、常設展及び県主催の企画展、特別展を開催するとともに、各展示室を一般の各種美術団体等に開放し利用いただいている。いわゆる「貸館」事業であるが、年間およそ 30 団体程の利用があり、スペース、期間ともに当館の運営上で占める割合は大きい。例えばもしこれら団体が展示室を利用しないとなれば、時期によっては展示、催事がなくなってしまう事態も起こり得るほどである。

新型コロナウイルス感染症は 2020 年 3 月頃には国内でいよいよ猛威を振るい、同年 4 月には全国都道府県に対して初の緊急事態宣言が発令された。それを受けて当館も 4 月 21 日から 5 月 10 日まで臨時休館したが、しかし先んじて動いたのが一般団体の方々であった。同年 3 月から 7 月にかけて当館で開催される予定であった、一般団体の展示会のキャンセルが相次いだのである。その数は 10 団体。洋画、書道、写真等の県内の美術団体の他、話題となっていたマスコミ各社主催の展示会（漫画展、有名書家の回顧展）も軒並み中止となり、2020 年前半期の当館の行事予定表は「真っ白」になってしまった。

こうなれば当然、私たちが展示室を埋める―「自

力（じりき）」で何とかするしかない。急遽、開催中の常設展の内容と会期の見直しをおこないつつ、さらに新規に展示会を企画、開催することとした（テーマ展「佐賀・日本画の眺望」「咲いた！花の絵―県美コレクションから」等）。私たち学芸員にすれば展示会のアイディアは常にストックしているのだが、しかしどのような展示であれ、実際に形にするには相応の労力を要し、まして時間が切迫しているとすれば尚更である。そして予算の問題も頭が痛い。

展示室のキャンセル対応に追われる中、佐賀県は県有の各展示施設について、5 月 11 日からの再開を決定した。もちろん、再開は館内での感染拡大防止策を徹底したうえでのものであり、予期せぬ困難が待ち受けているであろうにしても、私たちにとっては開館できることが何よりの喜びであった。しかし利用者から、以下のような声も少なからず聞かれたのである。「…このような状況で、美術館を開ける、というのですか」。感染拡大防止のため、日本中のあらゆる施設が接触機会の低減によるクラスターの阻止に躍起になっているというのに、美術館の態度は何事か、ということである。だが一方で、待ちかねたように訪れる方もおられ、利用者―来館者の思いは複雑であったに違いない。感染症は、美と生命の礼賛を標榜する「美術館」を、人々の健康と生命を脅かす場所に変えてしまう。感染症が社会のあらゆる価値観を変質させてしまう威力を備えていることを強く感じさせる出来事であ

あった。

2020 年度の当館の統計を見ると、同年 4 月～6 月期の入館者数は、前年比の約 2 割程度であった。年間入館者数は最終的には前年度比 6 割程にまで回復したものの、感染症の影響は甚大であった。以降、感染症は拡大と縮小を繰り返しながら現在に至っているが、私たち美術館はこの未曾有の事態の中にあっても、果たすべき社会的役割がある限り、活動の歩みを止めるわけにはいかない。そして、美術館の「地力（じりき）」を最も発揮できるのは、やはり展示会である。

佐賀県立美術館では、2021 年 9 月から 10 月にかけて特別展「白馬、翔びたつ―黒田清輝と岡田三郎助」を開催した。これは国立博物館収蔵品貸与促進事業の特別協力を受けた自主企画展で、当館の活動趣旨の一つ「岡田三郎助と近代洋画の佐賀」に連なる、いわば原点を見つめ直す内容であった。

重要文化財「舞妓」をはじめ、東京国立博物館所蔵の 22 点の黒田清輝ら近代洋画の名品と合わせて、岡田三郎助の名作を全国的美術館や所蔵者から借用した。この状況下、出品に応じていた

いた美術館には感謝の言葉しかない。そして一方で、昨年のコロナ禍により延期になった展示に供されるために、借用が叶わなかった作品も少なからずあり、各館の御苦勞も垣間見た思いであった。

特別展はその内容について、各方面から好評をいただいたものの、残念ながら所定の来館者数の目標には達することができなかった。会期の直前から半ばにかけて、感染症の第 5 波の襲来、第 4 回目の緊急事態宣言があり、人出に大きく影響したものと考えられる。人の動きがやや上向きになったのは、会期終盤近くになってからであった。

以上、縷々当館のことを述べたが、重なる部分、類似した状況の美術館も意外に多いのではないかな。

しかし現在ほど、私たち美術館の「自力」あるいは「地力」が試されている時は、これまでなかったのではないかな。美術館が持つ、残すべき、受け継がれるべきもの―それは作品あるいは資料と「ことば」に収斂される―は、「自力」であり、それらのたゆみない蓄積が「地力」を養う。そして、いかなる事態が起ころうとも、それらの価値はいささかも減じることはない。私たちはそのことを勇気として、この難局を乗り切っていきたいと思うのである。



急遽企画、開催したテーマ展「佐賀・日本画の眺望」展ポスター



佐賀県立美術館 特別展「白馬、翔びたつ―黒田清輝と岡田三郎助」会場風景

保存研究部会

盛本直美（もりもと なおみ・岩手県立美術館）
 邊牟木尚美（へむき なおみ・国立西洋美術館）

保存研究部会では年2回の会合を部会員の所属館で開催し、毎回特定のテーマを設定して、外部講師を招いての講演会や、部会員による事例紹介・意見交換などを行っている。残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、2020年2月27、28日に島根県立石見美術館で開催して以来、2020年度は対面での会合開催が実現しなかった。

今年度も引き続き、コロナ収束の見込みが立たないことから、去る11月26日、国立西洋美術館をホスト館として、2021年度第1回（第55回）の会合をZoomによるオンラインで開催した。オンライン会合の開催は、事前に部会員にアンケートを実施、回答者のうちの89%が開催を希望するという結果を受けたもので、新旧部会長の木本文平氏（碧南市藤井達吉現代美術館館長）と、村田眞宏氏（豊田市文化財課博物館準備室参与）の両名にご参加いただいた会合では、アンケートで関心の高かった「日常的メンテナンス」と「新型コロナウイルス対策」をテーマとして、参加各館によるプレゼンテーションを行った。

後者のテーマに関しては、来館者出入口の制限や、受付への消毒液、体温測定器の設置といった、基本

的な感染拡大防止対策のほか、ほとんどすべての館で、展覧会やイベントの中止、延期を余儀なくされたことの報告があった。さらには、徐々に再開しつつある講演会やワークショップなどのイベントについて、参加人数の制限、事前申込み制の導入、解説会をレクチャースタイルに変更するなどの工夫の事例紹介がなされた。そのほか、アクリルへ付着した飛沫の対策や、展示室の換気について報告する参加者もあった。

コロナ対策の話題の中でも、特に興味深く思われたのは、国内外への作品貸出対応である。貸出期間の延長に伴う相手館との連絡調整に忙殺されたというエピソードのほか、ZoomやWhatsAppでのチャットを使用して作品の状態確認等を行う「リモートクーリエ」の実践と、そのメリットデメリットについて紹介があった。

初のオンライン会合で開催前には不安もあったが、各館の取り組みを知るこの貴重な機会は、改めて情報交換や館同士の横のつながりの重要性を実感するものであった。なお今年度第2回（第56回）会合は、2022年2月に福岡市美術館にて、対面での開催を予定している。



第55回会合（オンライン）



ホスト館（国立西洋美術館）の様子

教育普及 研究部会

吉澤菜摘（よしざわ なつみ・国立新美術館）

教育普及研究部会では前回の報告（『ZENBI』19号掲載）以後、オンライン形式の会合を2回、対面形式の会合を1回行った。各会合の概要は以下のとおりである。

第54回会合（オンライン開催）

「with コロナ時代の教育普及活動の在り方」
 （2020年12月15日／101名出席）

第55回会合（オンライン開催）

- ・分科会1「学校との連携について」
 （2021年2月25日／38名出席）
- ・分科会2「オンラインプログラムについて」
 （3月2日／38名出席）
- ・分科会3「フリートーク」（3月11日／23名出席）
- ・本会合「分科会報告会」（3月18日／49名出席）

第56回会合（長野県立美術館）

「長野県立美術館の学び・交流プログラムについて」
 （2021年11月25日／28名出席）

ここからは、約1年9ヶ月ぶりに対面形式で開催された、第56回会合について報告する。

会場となったのは、2021年4月にグランドオープンした長野県立美術館で、全国美術館会議の正会員から28名が参加した。地下1階ホールで行われた会合ではまず、長野県立美術館の松本透館長より、「ランドスケープ・ミュージアム」を基本コンセプトに、高低差10mの

傾斜地をいかして建てられた新しい美術館の魅力と、人と人が出会い、学び合う場を目指す長野県立美術館が重視する、教育普及の役割についてお話しいただいた。続いて、同館の青山由貴枝氏から、教育普及の三つの柱として掲げている「学び」、「交流」プログラムと、「インクルーシブ・プロジェクト」について詳しく説明いただき、その後2組に分かれて施設内を見学した。開催当日は天候にも恵まれ、周囲の美しい山並みと善光寺を一望しながら、「ランドスケープ・ミュージアム」を実感する施設見学となった。

見学の後には地下1階ホールに戻り、インクルーシブ・プロジェクトの一環として開発された「ひらくツール」を実際に触りながら、4～5人のグループでディスカッションを行った。討議の前半は、「ひらくツール」の活用方法や事業展開に関するアイデアを出し合い、後半は各館でのインクルーシブの取り組みや、実施するうえでの課題について意見を交わした。今回は日帰り出張でも参加できるように各プログラムの時間配分を短めにしたが、ツールを触りながら討議したり、休憩時間に情報交換をしたりと、対面形式ならではの活動を再開できたことは、幹事として感慨深かった。

今後の会合も、部会員の声を聞きながら、オンラインと対面どちらかを選択して開催していきたいと考えている。次回会合は、2022年2月にオンラインでの開催を計画している。



第56回会合（長野県立美術館）



第56回会合 施設見学の様子

情報・資料 研究部会

鴨木年泰（かもぎとしやす・東京富士美術館）

2017年度から継続して取り組んでいる「美術関係アーカイブズ資料所在調査」について、当初予想を上回る回答数（美術館数 209 館、資料数 505 件）となったため、当初計画を変更し、アーカイブズ資料の有無と名称公開について OK と回答した館の資料について全国美術館会議ホームページに掲載する作業に取り組んでいる。8月に各館へ掲載内容の事前確認作業を実施し、8月末までに一通りの確認作業を終えた。現在は公開リストの最終的な取りまとめ作業を行っており、本年度中の公開を目指している。本アンケートの回答結果から、アーカイブズ資料についての主な課題認識として、「人員、予算、場所、時間の問題」「方法、知識、技術の問題」「資料に関する情報の引き継ぎの問題」「所有権、著作権、個人情報保護の問題」が得られたことを報告しておきたい。

所蔵作品情報の発信に関して、全国美術館会議がつなぎ役を担っているジャパンサーチに関する3件のオンラインイベントに協力した。6月11日に内閣府知財産戦略推進事務局と国立国会図書館の共催で開催された「ジャパンサーチ連携説明会 ～地域アーカイブをつくる・つなぐ・つかう～」(<https://jpsearch.go.jp/event/cooperation2021>) には、筆者が美術

館のつなぎ役として事例報告並びにパネルディスカッションに参加した。6月19日に開催されたアート・ドキュメンテーション学会年次大会シンポジウム「美術館コレクション検索はどこへ向かうか ～日本のプラットフォームの現状と将来像～」(<http://www.jads.org/news/2021/20210619-20.html>) には幹事の川口雅子氏（国立西洋美術館）と筆者が事例報告及びパネリストとして出席。続いて9月24日に国立国会図書館の主催で開催された「ジャパンサーチ イベント ～ミュージアムにとってのジャパンサーチ～」(<https://jpsearch.go.jp/event/cooperation202109>) に、連携機関事例報告として愛知県美術館の副田一穂氏と幹事の川口氏が事例報告及びパネリストとして参加している。

ジャパンサーチについては、9月に新たに大阪市立東洋陶磁美術館が連携し、現在までに愛知県立美術館(2020年7月～)、東京富士美術館(2020年7月～)、ポーラ美術館(2021年1月～)の4館が連携した。このつなぎ役としての取り組みにあたり、随時国立国会図書館と協議をしながら推進している。今年度実施予定のジャパンサーチ連携に関するワークショップ等のイベントについては、年度内の開催について検討を進めていく予定である。



ジャパンサーチ連携説明会（オンライン）



ジャパンサーチ イベント（オンライン）

小規模館 研究部会

高橋幸広（たかはし ゆきひろ・掛川市二の丸美術館）

小規模館研究部会では、基本的に年2回の活動を行っている。全国美術館会議の総会時に総会開催地にて開催する会合と、例年11～12月頃主幹事の美術館所在地にて開催する研修会である。しかしながら、本年度は新型コロナウイルス感染拡大により全国美術館会議の総会がリモート開催となったため、1回目の会合は書面による報告という形での開催となった。

資料として次のものを各加盟館に送付し、併せて返信フォームにて各館からの意見を募った。①令和2年度活動内容及び決算 ②令和3年度活動計画及び予算(案) ③幹事館の交代(令和2年度主幹事のBBプラザ美術館に代わり、絹谷幸二天空美術館が幹事となった。) ④加盟館名簿及びメーリングリストの確認 ⑤新規加盟館について(岡山県の勝中央美術文学館が新規加入した。)

また返信フォームでの自由意見には、コロナ禍で通常と異なる会の運営を思いやる声や、コロナにより昨年度計画をしながら開催できなかったテーマ「美術館資料・作品の記録保存と整理」についての開催要望などの意見があった。回答の集計結果は各加盟館に再度送付した。

第51回研修会・会合は、新型コロナウイルスの感染も落ち着きつつあると判断し、2021年12月7日、8日の2日間で掛川市中央図書館を会場とし開催することにした。ただし、例年行っている研修後の意見交換会は中止とし、2日目に予定していた市内の美術館巡りは掛川市二の丸美術館近隣施設を徒歩で見学する内容に変更した。研修会のテーマは「コロナ禍における小規模美術館の在り方」とし、坪井則子氏（公益財団法人佐野美術館 館長）、神谷剛生氏（刈谷市美術館 専門員）、日比野秀男氏（掛川市二の丸美術館 館長）のお三方から事例発表を行っていただいた。運営主体が私立、直営、指定管理者とそれぞれ違う立場から美術館にとっての運営危機への対応を、実体験をもとにお話しいただいたので、部会員にとっては今後の運営に大いに参考になるものとなった。2日目の会合では、新規入会希望のヨックモックミュージアムの入会承認と2022年度の活動内容について市立小樽美術館から説明していただいた。昼食後は掛川城、御殿、掛川市ステンドグラス美術館など、当館近隣の文化施設を視察し、解散となった。



第51回研修会



第51回研修会

美術館運営制度 研究部会

安田篤生（やすだ あつお・奈良県立美術館）

1年前の本誌（19号、p.25）で報告して以降の大きな動きとしては、まず2021年3月5日に開催した第35回学芸員研修会がある。美術館運営制度研究部会（以下「MRG」）が企画担当した第35回は「アフターコロナに向けて～美術館運営支援を考える」をテーマに、共催の国立新美術館を配信会場として、初めてオンラインのウェビナー形式で実施した。これは、MRGが実働を担って会員館に対して実施（2020年9月～10月）したコロナ禍対応に関するアンケートの結果も踏まえたものであるが、340名という多数の参加をいただき、ありがたいことである。研修会の内容については、本誌前号の全美フォーラム（20号、p.2-6）にてMRGメンバーでもある逢坂恵理子副会長（国立新美術館長）がレポートしていると同時に、恒例の学芸員研修会報告書は2021年9月に発行済なのでそちらに譲ることとする。なお、報告書のPDF版も全国美術館会議公式サイトの会員館ページにアップロード済である（A4用紙に両面印刷すると冊子版と同じ体裁になるようにPDFを組んであるのでよろしく）。

さて、MRGは全国美術館会議副会長でもあった山梨俊夫氏（前国立国際美術館長）が長らく部会長の任にあったが、2021年3月末で国立国際美術館を退任されると共に部会長からも退かれた。新しい

部会長には浅野秀剛氏（大和文華館長）が就任し、新部会長による最初の部会合（通算第34回）は2021年8月10日にオンライン形式で実施した。報告事項が主だったが、上記の学芸員研修会やコロナ対応アンケートのその後が話し合われたほか、文化庁の文化審議会・博物館部会で討議が進められている博物館法改正に向けた動きの情報共有も行った。そして（これが肝心なことだが）今後のMRGの活動をどうしていくかについて意見交換した。一つの課題は『美術館の原則と美術館関係者の行動指針』（2017）の見直しである。これは作成当初、5年ごとに理事会及び総会において見直しを行い、理事会がその作業をMRGに委嘱できることになっていたものである。これについてMRGとしては、上記のように博物館法改正の動きが進行中なのでその動向が定まってから見直せば、ということに落ち着いた。もう一つ、第35回学芸員研修会でも取り上げたように、コロナ禍で美術館の運営・経営はますます厳しくなっている。そこで、設置主体・施設規模・地域など対象に幅を持たせつつ、可能な範囲で美術館の運営・財務状況の情報を集めて把握することにはどうか、ということになった。次回会合は、2021年12月7日に大阪市立美術館にて対面形式で実施した。



第35回学芸員研修会（オンライン） 国立新美術館にて配信の様子

地域美術 研究部会

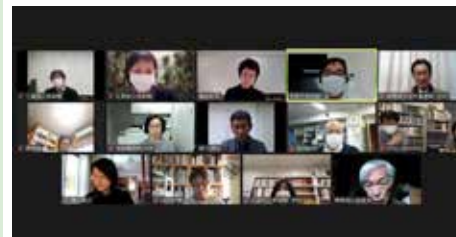
藤崎 綾（ふじさき あや・広島県立美術館）

地域美術研究部会では、全国の地域美術に関する調査・研究の情報交換と学芸員の相互協力を図るという基本方針及び目標のもと、今年度も活動を行った。コロナ禍前の一昨年度までは、年に2回の会合を開き、1度目は総会開催の翌日に近隣地域で行ってきたが、今年度は京都での総会開催の中止に伴い、会合も取りやめとなった。

仕切り直して10月27日に行った第12回会合は、Zoomミーティングによるオンラインでの開催で、午前の部では、京都市京セラ美術館の森光彦氏による「近代京都における、学校を中心とした地域社会と美術作品について」と題した発表を聴講した。森氏の前所属先である京都市学校歴史博物館は、京都市の学校に残された美術作品や歴史資料を収蔵するが、美術作品ではなく市立小学校の所蔵が多く、絵画、彫刻、陶磁、染織など2,000点を超える作品が確認できるという。制作年代も江戸から昭和まで幅広く、上村松園や菊池契月、梅原龍三郎、安井曾太郎ら著名作家の作品も含まれる。発表は、なぜ京都の小学校にこれほど多くの美術品が所蔵されてきたのかについて、具体作品を示しつつ、京都独自の学校の歴史からその理由を明快に説明する内容であった。京都では、1869年に本邦初の学区制小学校ができるが、この「学区」は単なる通学域とは異なり、室町時代に形成された「町組」（後に「番組」として再編成）と呼ばれる自治組織を起源に持つもので、京都市中に

は各番組を学区として64もの番組小学校が創設された。このため、町民（学区民）にとって小学校とは教育施設であると同時に警察や消防の拠点であり、役所としての機能も担う地域の中心であった。さらに、番組小学校は学区民が出し合った資金により建設、運営されたため、自治の象徴でもある「自分たちの学校」の教育環境を充実させ、また他校に負けないように飾るべく、教育的主題の作品を含む多くの美術品や教材等が学区民から寄贈されてきたのだという。学校統合の進む現代にあっても祭事をその単位で行うことなどから「番組の意識」は残っているといい、発表の最後には、今後の課題として、作品とともに、学区民たちが代々伝えてきた寄贈経緯や作家の経歴など周辺情報も含めて、地域住民と協力して保存していく必要性が語られた。オンライン開催のため作品の実見は叶わないものの、京都ならではの学校の歴史や文化力に触れる貴重な機会となり、事後の質疑時間には、小学校設立の発想が生まれた背景や学校での作品の活用方法、主要画題や学校に対する現在の学区民の意識などにつき、活発な意見交換がなされた。

午後の部では、今年度、当部会が担当する学芸員研修会についての協議を行った。「なぜいま、地域美術を研究するのか」を研修テーマとし、今後は部会長・幹事を中心に具体的なプログラム構成を検討し、実施に向けて準備を進めていくこととなった。



第12回会合（オンライン）



第12回会合（オンライン）

全国美術館会議の活動は以下の賛助会員各社の支援を受けております。
会員各社のお名前を記して、心より感謝を申し上げます。

株式会社集英社

カトーレック株式会社 株式会社伏見工芸 ヤマト運輸株式会社

株式会社アート・ベンチャー・オフィス ショウ	一般社団法人全国美術商連合会
有限会社イー・エム・アイ・ネットワーク	公益財団法人ダイキン工業現代美術振興財団
イセ文化財団	大日本印刷株式会社
株式会社NHKエデュケーショナル	株式会社DNPアートコミュニケーションズ
株式会社NHKプロモーション	株式会社東京美術倶楽部
株式会社加島美術	凸版印刷株式会社
協同組合美術商交友会	株式会社トップアート鎌倉
株式会社グッドフェローズ	ビーブルソフトウェア株式会社
株式会社クレヴィス	株式会社美術出版社
株式会社廣済堂	有限会社丸栄堂
金剛株式会社	株式会社ユニークポジション
JOPD 株式会社	株式会社レンブラント
進和テック株式会社	早稲田システム開発株式会社
せとうち美術館ネットワーク	

アート印刷株式会社	日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社
イカリ消毒株式会社	読売新聞東京本社
M&I アート株式会社	ライトアンドリヒト株式会社
株式会社ギャルリーためなが	

有限会社アート・フリース（大阪美術）	株式会社生活の友社「美術の窓」
株式会社アートログ	株式会社丹青研究所
影山 幸一	株式会社 TT トレーディング
株式会社学研プラス	トライベクトル株式会社
株式会社求龍堂	美術年鑑社 新美術新聞
株式会社キュレイターズ	

石巻市博物館の出発、その他

事務局長 山梨俊夫（やまなし としお）

11月3日文化の日に石巻市博物館を訪ねた。仙台から仙石線東北ライン快速で1時間ほどかけて石巻駅に、タクシーに乗り10分強で目指す博物館にたどり着く。2011年3月の東日本大震災で津波の甚大な被害を被った石巻文化センターが海辺にあったので、内陸部に移ったと聞いていた。どこか高台に新たな建物を建設したと想像していたのだが、旧北上川の川辺にほど近い総合運動公園に隣接した場所に、低い塔のような屋根を連ねた白い建築が見えてくる。標高は低くとも津波が到達しなかったことから立地に選ばれたらしい。

博物館は、大ホール、小ホール、市民ギャラリーを併設し、アトリエ、研修室、創作室、活動室、和室などの様々なスペースをもつ複合文化施設の一部で、地域の歴史をたどる常設展示室とテーマ展示をする企画展示室とがコンパクトに並んでいる。

この日は、複合施設「マルホンまきあーとテラス」のお披露目の日で、博物館以外のスペースでは「みやぎ県民祭」が開かれ、ずいぶん賑わっていた。博物館の常設展示スペースでは、地域の民俗と歴史にまつわる展示、木彫家高橋英吉と娘幸子の作品による開館記念展示が開かれていた。石巻出身の高橋英吉は東京美術学校で木彫を学び、研究科を中退して南氷洋の捕鯨船乗組員となった。その経験から想を得た『黒潮閑日』『潮音』『漁夫像』の《海の三部作》などの作品が知られる。太平洋戦争で兵役に就き

ガダルカナル島で若くして戦死している。石巻が大事にしている高橋英吉の一群の作品が博物館に引き継がれ、開館記念の常設展示で改めて強い光が当てられていた。

さて、筆者が開館の日に当地を訪れたのは、東日本大震災からの復興の象徴としての新しい施設もさることながら、企画展示室で開かれた開館記念企画展「文化財レスキュー 救出された美術作品の現在（いま）」を見る目的を理由とされていた。高橋英吉との関連で主として木を素材にした作品を収集していた石巻文化センターのコレクションが、周知のようにほとんどすべて地震と津波の被害を受けた。全国美術館会議も参加して被災作品の救出に当たり、残念ながら流されて行方不明の作品もあったが、救出されたものはまず宮城県美術館で応急処置をし、その後同美術館を始め、国立西洋美術館、東京藝術大学大学美術館、神奈川県立近代美術館、東北芸術工科大学で修復作業を続けていた。10年6ヶ月の長きにわたった木彫と資料群の修復によりやく一応のめどが立ち、新博物館の出発に合わせて10月初旬に各美術館・大学から石巻に返還された。その一部が展示されている。レスキュー作業の様子を伝える写真と解説も丁寧に付随され、とりわけ震災当時のありさまとレスキュー参加者の奮闘ぶりがうかがえる展示となっていた。中では、圓勝鰐三の木彫の人体像が津波の傷跡をそのままに残され、被害の生々しさを感じさせていた。

大震災の津波に被災した美術作品は、石巻に限らず、三陸海岸沿いの美術館、博物館、個人コレクションと広範囲にわたった。全国美術館会議は震災直後から、当時の企画幹事村上博哉氏（国立西洋美術館、当時）を軸にして会員館に広く呼び掛けて、いち早く救出活動に乗り出し、その後も被災地域の会員館に対して活動支援を続けた。石巻文化センターの被災作品修復は、上記各施設の保存修復担当学芸員の方たちが粘り強く作業を続けて来られ、10年の時を経てほぼ終了するに至った。新しい博物館の展示室に一堂に会し、被災当初の状況、その後の処置の様子との報告と併せて展示されたのを見ると、感慨深いと済みだけではなく、思いがけない災害の可能性が増大する将来に向け、美術館同士の連携、災害に備える日頃の構えの必要性を発する警鐘がここにあると改めて思い知らされる。

石巻市博物館の出発は喜ばしいが、川崎市市民ミュージアムの浸水被害に遭った作品の修復作業は続行中であり、これからも長期にわたって続ける必要が見通されている。川崎市と市民ミュージアムが水害後、膨大な量の被災作品を長期計画のもとで回復させようと懸命な努力を払っていることに変わりはないが、新型コロナウイルスの蔓延状況で中断されていた修復作業への応援が呼び掛けられ、全国美術館会議としてそれに応えて、11月22日から応援を再開した。長期間継続されるこの修復作業は、修復の専門的技術を要しない範囲のものであるので、ホームページをご覧になり、本来業務との折り合いを見てぜひ参加していただきたい。

また、現在、文化庁が推進する博物館法の

改正作業についても簡単な報告をしておきたい。博物館法が出来て70年以上経過し、これまでに若干の改正が施されてきたが、法の定める内容が現状にますますそぐわなくなってきたため、現段階では博物館の定義と学芸員資格について、改正の方向が様々に論議されている。論議に加わっているメンバーに美術館関係者が少なく、とくに改正の具体的内容を練るワーキング・メンバーに手薄感が強かった。ワーキングのオブザーバーとして公立私立美術館から5名の参加を文化庁に要請し、現在その方たちの参加を得て改正の方向を注視してもらっている。

2021年12月の時点で文化審議会博物館部会が法改正に向けて「博物館制度の今後の在り方について」の答申を出し、そこでは現行の登録制度について現状に見合う方向での改善が提案されている。設置主体や学芸員の有無といった外形的基準よりも活動内容に重点を置いた審査によって新たな登録制を実行し、活動の向上を図る趣旨が骨子となっている。学芸員制度については博物館部会で論議されてきたが、この点は答申として具体的な提案に今回は至らず、今後の課題として継続して検討されるようである。この事案も軽視できないので、正会員の積極的な関心が寄せられることを願っている。

以上、事務局から最近の情勢に関して重要事項の二三をお知らせして、皆様と関心を共有していきたいと考える。

編集後記

『ZENBI』の21号をお届けする。新型コロナウイルス感染症は相変わらず猛威をふるい、以前の日常からはほど遠い毎日が続いている。この中で機関誌『ZENBI』の発行をめぐる状況にも変化があり、19号以降は以前のように機関誌部会としてではなく、広報委員会によって発行されている。同じタイミングでホームページ部会も広報委員会に組み込まれ、現在、機関誌とホームページという全国美術館会議の広報媒体はいずれも広報委員会によって運営されている。2年続けて対面での総会が開かれていないため、十分な周知ができているか少々不安でもあり、この場を借りてもう一度お知らせしておく。

奇数号には部会報告が掲載される。1年前の19号では半頁しか記事のない部会があったが、今回は例年どおり全ての部会で1頁を用いての報告となったことは、美術館がようやくコロナ禍を乗り越えつつあることを暗示しているかもしれない。

ブロック報告に関しても、ようやくブロックや他館を俯瞰する報告が増えてきたように感じる。もはや私たちがコロナ以前には戻れない以上、それぞれの地域、それぞれの美術館で感染症対策を講じていかなければならないだろう。展覧会の組み立てから運営、普及活動や広報まで、コロナ禍は美術館にとっても以前と以後を明確に分かつメルクマールとなり、まだまだ私たちは模索の途上にある。新しい試みや工夫があれば、今後もこの欄で積極的に紹介していただきたい。

全美フォーラムでは前回に続いて博物館法改正に関する記事を掲載した。この問題については引き続き投稿をお待ちしている。また前号の川崎市市民ミュージアムの被災状況と対応に関する報告に続いて、今回は東日本大震災で被災した石巻文化センターの文化財レスキューについて締めくくりとなる記事を掲載する。息の長い活動であった。様々な局面で関わっていただいた皆様にあらためて感謝を申し上げる。一方、最近日本各地で頻発している地震はまことに不気味に感じられる。疫病の蔓延によって足腰の弱っているこの国の美術館にさらに天災が追い打ちをかけることがないように祈りたい。 (O)

『ZENBI』では、次の要領で広く
皆さんからの原稿をお待ちしています。

[原稿の内容]

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

[投稿の資格]

- ・全国美術館会議正会員の職員であればどなたでも投稿できます。

[提出先]

s-osaki@pref.tottori.lg.jp (尾崎)
aoyama_k@nmao.go.jp (青山)

- ・匿名の投稿は受けつけません。

[投稿に係る詳細]

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

[締切]

- ・第22号(2022年7月発行予定)については4月30日、第23号(2023年1月発行予定)に関しては10月31日を締切とします。(当日必着)

[問い合わせ先]

内容に関する問い合わせについては下記まで御連絡ください。
〒680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
(一社) 全国美術館会議広報委員 尾崎信一郎
s-osaki@pref.tottori.lg.jp TEL 0857-26-8042

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議正会員の職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌(電子媒体を含む)に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿(写真を含む)は原則としてメールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として2,000字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは(一社)全国美術館会議広報委員会(以下「広報委員会」という)に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。

- (3) 個人を特定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。

- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は広報委員会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は(一社)全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典(掲載誌名、巻ページ、出版年)を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌5部を進呈する。

美術品管理システム

Artize MA

NISSHA 独自のアーカイブ構築ノウハウから生まれた 収蔵作品(資料)管理のための高機能データベース

「Artize MA (アルタイズ・エム・エー)」は、NISSHA の高級美術印刷への豊富な取り組み経験やデジタルアーカイブ構築ノウハウから生まれた「収蔵作品管理」「収蔵資料管理」のための高機能データベースシステムです。

日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社

<http://artize.nissha-comms.co.jp/>

担当: 石濱・相筈 〒604-8551 京都市中京区壬生花井町3 075(823)5151



IPMを取り入れた保存環境づくりと 虫・カビの防除で文化財を守りましょう。



調査・診断

- ▼博物館・美術館・図書館・寺社等の環境調査
- ▼調査セットによる環境調査
- ▼昆虫や微生物の同定
- ▼生物の被害調査・診断

資格・認定

- ▼文化財虫菌害防除作業主任者
- ▼文化財IPMコーディネータ
- ▼文化財虫菌害防除薬剤等認定

コンサルティング

- ▼保存環境・防除薬剤

防除処置

- ▼殺虫・殺菌処理の受託
- ▼燻蒸効果判定

研修・普及

- ▼文化財の保存に関する研修会・講習会
- ▼図書の出版

公益財団法人 文化財虫菌害研究所

〒160-0022 東京都新宿区新宿二丁目1番8号 新宿フロントビル6F
TEL 03 (3355) 8355 FAX 03 (3355) 8356 www.bunchuken.or.jp



丸栄堂

美 術 商

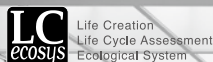
日 本 画 ・ 洋 画 ・ 工 芸

代表取締役 浅木 正勝

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-4-8

TEL. 03-3831-7821 FAX. 03-3831-7771

<http://www.marueido.com>



文化財と人と環境を第一に。

文化財保存分野に参入してから40余年、守り続けたものがある。

長年の経験と実績により、博物館・美術館等それぞれの施設環境に
合わせた文化財IPM(総合的有害生物管理)プランをご提案いたします。

調査・診断

現状調査・診断／設計
原因究明・検査／分析

防除・メンテナンス

モニタリング
殺虫／殺カビ
IPM メンテナンス

その他サポート

教育研修支援
IPM 構築支援
関連商品販売

環境エンジニアリング 全国100事業所



イカリ消毒株式会社

<https://www.ikari.co.jp>

本 社 | 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-27-11 TEL. 03-3356-6191 FAX. 03-3350-1405
大阪オフィス | 〒542-0076 大阪府大阪市中央区難波5-1-60 TEL. 06-6636-2741 FAX. 06-6636-2720